

## ユダヤ系アメリカ人の苦悩 —*The Bellarosa Connection* をめぐって—

木下喜美

作家とその民族的背景の影響について、どのようにとりあげるべきかは難しい問題である。ソール・ベロー (Saul Bellow) の場合、ユダヤ系作家という文脈の中で語られることが多い。しかし彼はまた、移民二世としてアメリカに育ち、アメリカの教育を受けている。ユダヤ人であると同時にアメリカ人であるベローは、いわゆるユダヤの価値をどのように考えているのか、またどのように二つのアイデンティティに折り合いをつけているのか。*The Bellarosa Connection* (1989) をとりあげ考察してみたい。

ベローの作品は、主なところでは、*Henderson the Rain King* (1959)、*The Dean's December* (1982) を除き、主人公がユダヤ人であるのが特徴的だ。彼の生い立ちを見ると、母親が「中世から抜け出たような」と評される厳格な正統派ユダヤ教徒で、彼がタルムード学者になることを望んでいた事はよく知られたエピソードである<sup>(1)</sup>。評者の中には、ベローのなかのユダヤの特性について強調する者もある。ルイス・ハラブは、「人生の価値に対するユダヤの基本的な肯定」<sup>(2)</sup>に執着していると論じている。一貫してベローの作品を人生肯定的ヒューマニズムという観点から読み込むジョン・クレイントンなども同じ考え方で、彼の人間への信頼と人生そのものへの忠誠は「歴史を通じてユダヤ人社会が被った打撃から生じる絶望感に対する鎧」<sup>(3)</sup>であると定義して、このように彼の作品の大らかな人生賛歌的側面をユダヤ的にとらえている。作品全体を通じて脈打つ精神の根源を彼のバックグラウンドに見出していると言えるのだ。とはいえ第二次大戦以降に頭角をあらわしたユダヤ系作家の一群のなかで、ベローの位置を探るとするならば、ハーマン・ウォーク (Herman

Wouk) のようなユダヤ系という背景を存分に活用し、焦点をユダヤ系の問題に限る作家、あるいは逆に民族的な背景を全面に押し出さずもっと根源的、普遍的な問題に迫ろうとするノーマン・メイラー (Norman Mailer), ジョセフ・ヘラー (Joseph Heller) らとも異なり、ベローの主人公はユダヤ人であるが、扱う内容はもっと広範にわたると考えられる<sup>(4)</sup>。ユダヤ系作家であっても、以上のような立場をとるベローであるから、自分の作家としての起源について触れたエッセイ “Starting Out in Chicago” では、若いころには、図書館で「タルムードではなく、シャーウッド・アンダーソン (Sherwood Anderson) の詩や小説」<sup>(5)</sup> を読み耽っていた、とわざわざことわり、自分はしばしばユダヤ系作家という範疇に入れられるが、「居心地よくおさまっている気はしない」(72) と言い、安易な分類には異を唱えている。

彼はまたこうも語る。「私が愛した憎みもする唯一の生活は、私が一私達が一ここで目にする、20世紀のアメリカの生活です。ユダヤ人でありアメリカ人の生活です。このよりどころのどちらに大きい忠誠心を持つかって。二つは、対立するものですか。選択をしなければいけませんか。」<sup>(6)</sup> さらにベローは、1976年にイスラエルを訪問したとき、イスラエルに留まることによって初めて、「歴史に再び参入できる」という主張に対して「私がユダヤ人であろうと何であろうと、60年あまりに及ぶ人生を放棄して、私の存在の源 (sources of being) への感情を捨て去るなどという助言には応じられない。そんなことをすれば、自分は消滅してしまう。そんなことは不屈きなことだし、自己破壊だ。」<sup>(7)</sup> とも主張している。このように見てくると、彼にとっては、ユダヤ的精神とアメリカ人としての生活が過不足なく融合し、決して背反するものではないことが明らかである。

そこで、彼の最近作 *The Bellarosa Connection* について考えてみる。だがその前に、ベローはホロコーストを題材に現代アメリカという場とユダヤの価値観の微妙なせめぎあいを正面きって描いた作品を発表していたことを指摘しておく。*Mr. Sammler's Planet* (1970) がそれである。ただ、最近作では、72歳の老人である語り手はホロコースト体験者を客観的に見つめる役回りだが、

前作では同じ70代のサムラー氏自身が、ホロコーストを体験し、妻を殺害され、自分も殴打され片目を失うという悲惨な体験の持主であり、彼の視点から、アメリカ会社がとらえられるという構造となっていることが違いとしてある。

この小説において、サムラー氏の世界はどのように描かれていたのだろうか。1947年にいとこの医師アーノルド・グルーナーによって招かれて以来、サムラー氏にとってアメリカは、決して住みよいところではない。「世界中の、あらゆる国のなかで、もっとも望ましく、模範的と喧伝」<sup>6)</sup>されているわりには、「墮落」し、「野蛮」(Sammler 7)な薄汚れた場所である。なぜなら彼は「精神に重きをおいて、プラトンの的で、アウグスチヌスので、13世紀的な」人物であり、しばしば、「ほかの人間たちとは、隔絶しているように感じる」(Sammler 43)ほど高い精神性を求める人物だからである。

まさに荒地そのもののアメリカで、彼は講演先の学生からは、時代遅れと罵倒され、目撃した黒人のすりには詰め寄られと、散々な経験をする。また彼を取り巻くアメリカの親戚たちも、性的に放縦な姪のアンジェラ、定職につかず父親が隠した大金を探して、水道管を破裂させるような無謀なウォラスなど、サムラー氏とは程遠い性質の持主である。

ただ、この作品では、ユダヤの歴史、あるいは価値観と、アメリカの相克という問題は全面に出て来ない。なぜなら、もともとサムラー氏は、ユダヤ人という確固たる意識が希薄な人物として設定されているのである。

一方、最近作での関心はその一点に集中する。強烈なユダヤ人としての自意識を持つ者を目の前にして、アメリカに生まれ育った者はどう対応するのか。それがこの作品の主題とって過言でない。書評を見るとおおむね好評をもって迎えられたといえる。*National Review* 掲載のジェフリー・ハートによる書評では、*Dean's December* (1982) 以来芳しくなかった評判もこの作品では挽回し「輝くばかりの最高の作」<sup>6)</sup>であると絶賛されている。しかし、*The Nation* の評者は不満を示している。語り手から「ナチの死の収容所での、イノセンスの終焉」<sup>6)</sup>などについて聞き出したかったのに、中途半端で終わってしまい、何の評価もされていないというのが言い分である。けれども、

この不満は的外れであると言わざるをえない。*The Bellarosa Connection* は、ホロコーストを含めユダヤ的体験と向き合うときのユダヤ系アメリカ人の揺れ動きを描いているからで、語り手がホロコースト自体に明確な意見表明しない点にこそ問題の核心があるとも言える。

この作品は、フィラデルフィアに記憶術研究所を開いて40年になる72歳の語り手により進行する。語り手の記憶術は成功し、世界各国に支部を持つまでになる。数百万ドルの資産は堅実に投資にまわして、裕福な生活をおくる彼は、南北戦争前の瀟洒な邸宅に住み、贅を尽くした調度に囲まれた悠々自適の引退生活を楽しんでいる。若い頃に、父の反対を押し切って非ユダヤ教徒の妻と結婚し、その生活には、宗教色は皆無で、いわば同化したユダヤ人の姿であるといえる。しかしながら、妻を亡くし、息子も結婚して独立した後、豪邸にたった一人で残されると、過去の出来事が様々に思い出されてくる。現在の生活とはかけはなれた、「ニュージャージーのロシアの血を引くユダヤ人の子供」<sup>90</sup>という自らの出自は特にこだわりとして残っている。移民の二世というのは、通常、旧世界の価値と新しい環境との間で引き裂れる一世に比べて、新世界の価値に容易に順応することが出来る。まさにその通りに生きて来た語り手が、老境に入って、「様々な思いと、なつかしさ」(3)に駆られつつ思い出すのは、ユダヤ人迫害を生き延びたハリー・フォンシュタイン夫妻との経緯である。

ハリーと語り手の出会いは40年前にさかのぼる。父親の紹介で会おうのだが、しきりに息子とひきあわせようとする父親の心情は、息子の示す反応とは対照的と言える。戦時中アメリカのユダヤ人社会は、ヨーロッパのユダヤ人がさらされていた事態について知らされていないというのが実情らしい。またルーズベルト大統領は、アウシュビッツに至る鉄道路線の空爆計画があったにもかかわらず、手を下さなかったと言われる。この事実は、アメリカに於けるユダヤの指導者たちに、ルーズベルト大統領を盲信していたため、悲劇の拡大を防ぐことが出来なかったという後ろめたさを植え付けている<sup>91</sup>。移民一世の父親の“情熱”は反省と後悔の裏返しとして、理解できる反応だろう。

一方、当時32歳でありながら、記憶術研究所の計画を暖めているだけで「グ

リニッジヴィレッジを徘徊し、子供じみて、腰を落ち着けるわけではなく、ぐうたらに」(5)過ごしていた語り手は、父親のすすめに気乗りがしない。ヨーロッパという「本物の世界」(5)での人々の苦境を耳にしたら、少しはしゃんとするだろうという父親の思惑に対して「アメリカ的幼稚さを告発され、父親の裁きを受けるため被告席に立たされる」(5)とためらう。実際フォンシュタインに会うと、「自分の旗色が悪い」(5)のは明らかである。ハリーの目には、「子供っぽい不安定なユダヤ系アメリカ人、人間的でも世間知らず」(7)と映るに違いない、と語り手は多少の劣等感をこめ思い込むが、実際、ハリーが人に与える印象は、「頑固」(7)そのもので、口元や目の辺りに機知が感じられるものの目をそらさないその話ぶりは、人を寄せつけない独特の強さを持ち、語り手は気圧される。

確かにハリーは、新妻のソレラを連れてキューバ経由でアメリカにたどり着いたばかりであったが、それまでの経過は数奇の一語に尽き、容貌からうかがえる内に秘めた強さも十分に納得が出来る。フォンシュタイン家は、一族の大半をナチによって殺害されている。宝石商の父親は、1938年に資産を没収され、やがて死亡。姉とその夫は田舎に身を隠していたのが見つかり、収容所で一生を終えている。ところが皮肉なことに、足の不自由なハリーと母親だけが、イタリア中を逃げ回る。しかしその母親も亡くなり、天涯孤独の境遇に陥った彼は、職を転々としながらその後も各地を渡り歩く。最終的にたどり着いたローマでは、語学の才能を買われて、通訳の仕事に就くが、身分証明書が偽造であることが発覚し、投獄されてしまう。ここで、この作品のもう一人の重要人物であるビリー・ローズが極秘に計画したユダヤ人救出作戦、(彼の名を取って通称ベラロサコネクション)の恩恵を受けて、脱走する。その後は、思いもかけず、キューバへ移送の憂き目に会うが、そこで身につけた知識を基に、アメリカで独力で暖房の事業を興したという履歴の持主である。

このようなハリーの身の上話を、語り手は大きな体を傾けながら、文字通りに傾聴する。それは何ととっても、「本物の出来事を目の当りにしたもの」(7)に対する敬意の印である。「フォンシュタインの歴史について、あれほどの破

滅を生き延びることがどういう意味を持つのか 忘れはしない」(48) と語る 彼は、その「太った体の組織細胞」の隅々にまで、夫が「失ったもの、彼の家族たち」(48) を取り入れ、必死に尊敬する夫の事業を支える妻のソレラの熱心な態度には心を動かされる。しかしながら、若い頃の彼は、二人とのあいだに乗り越えられない壁を感じる。それは歴史観の違いである。

たとえば、元フランス語教師で、知的なソレラは、ユダヤの歴史についてハリー以上にこだわりを持ち、収容所での、拷問方法などを、とくとくと話して聞かせる。けれども語り手は「残虐行為の歴史や、心理、それに処刑室や熔鋸炉のことなど考えたくはない。(中略) そんなことは僕には考えもつかない。」(28) と考える。

要するに語り手は、ユダヤの歴史の中に自分を位置付けることが出来ないのだ。彼は、多少自嘲もこめて、自分を「甘やかされたアメリカの息子」(19) と呼び、様々な影響や、思想を何の制約もなく享受しながら、アメリカの理念、「民主主義」と「平等」(24)のもとに生まれ育ったことを認めている。自分の思考は、アメリカという土壌で培われた。だから「考えるのは勝手だ。考えて考えて、でも歴史的臆想で何が解決するのだ。考えてもはじまらないんだ」(24) と言い、ソレラの話は肯定できないのだ。1世紀前の祖先たちのゲッター暮らしはもとより、同世代の収容所の話も、実際に経験したことのない語り手にとっては、実感を伴って迫っては来ない。「忘れてしまえよ、アメリカ流で行けよ」(29) とハリーたちに忠告する彼には、割り切りともいえる冷静さがうかがわれる。

しかしこの冷静さの裏に、実はジレンマも隠せはしない。ユダヤの歴史の流れの中で、アメリカ移住者は、きわめて幸福な環境にあることは間違いない。つい「一世紀前までは、ローマのユダヤ人は夜間外出禁止であった」(24) が、今はもちろん「柵に押し込められることもない」(24)。自由を謳歌できるのだ。また移民一世の自分の父親の世代と比べても、有り余るほどの栄養を与えられ体格だけはむやみに立派に育っている。しかし、それとともに失ったもの大きさも、よく見えているのだ。物語の中盤で、語り手はイスラエル旅行中、ユ

ダヤの歴史全体の中で、ユダヤ系アメリカ人の位置について考える箇所がある。

“A Jew in Jerusalem, and one who was able to explain where Joshua to the Judges, the Judges to the Prophets, the Prophets to the Rabbis, so that at the end of the line, a Jew from secular America (a diaspora within a diaspora) could jive glibly about the swinging Village scene of the fifties ..... Especially if you bear in mind that this particular Jew couldn't say what place he held in this great historical procession. I had concluded long ago that the Chosen were chosen to read God's mind. Over the millenia, this turned out to be a zero-sum game.”(37)

連綿と続いた歴史から切り離されて、神の心を読むことも叶わないという、自己認識が本音として登場する。アメリカ人としての誇りを示す一方で、ユダヤ人としての帰属意識がまるで希薄になったことへの苦い自覚をあわせ持っている。落ち着きはらった態度とうらはらに、彼の心理は実は複雑である。

一方、この作品におけるビリー・ローズは、アメリカという環境の中で何の痛痒もなく、易々と変節したユダヤ人の姿を強烈に印象付ける存在である。ビリーという男はアメリカ的成功物語を地で行く人物である。「アメリカではどこの馬の骨かわからなくても、立派にやっつけていける。とくに金さえあれば」(43) だから底辺からのしあがり、プロデューサーとして成功したばかりではなく巨万の富を築き、女優との結婚、美術品の収集、と思うがままの人生を送る。好色で始終女優の卵たちと浮名をながし、吝嗇で金銭に細いという有り難くない評判も鷹揚に受け流す。マフィアとの暗い交友が噂される一方で、大統領の知己でさえあるという設定だ。

彼は、実は、ハリーが思い描いていたような、なけなしの金をはたいて、同胞の支援をする、博愛主義者や理想家とは程遠く極めて世俗的な人物である。アメリカに到着後、ハリーはなんとかして礼を言いたいという一心から、幾度も手紙を書き、直接面会を求めるのだが、強硬に拒否され、慈善基金にと善意で送った金もつきかえされる。不思議なことに、ビリーは、救出作戦など無かつ

たかのように、いっさいのかかわりを否定する。結局ビリーの真意は何なのか。ソレラは、彼に敬意を表するというよりは、軽蔑の対象としてとらえるようになる。彼の行動は要するに芝居がかり、自己顕示欲が透けて見える。ユダヤ人に対する戦争に対して、マジソンスクエアガーデンが人の波で埋まるような抗議集会を組織するのだが、「ハリウッドの要領で」(59) 宣伝はいきとどき、有名人がおおびらにすすり泣いてみせるのは欺瞞以外のなにものでもない彼女が批判する。「彼の先祖たちの神はまだまだ重要」(13) で、それへの忠誠心と「同胞のユダヤ人たちへの思い」と「ヒトラーやヒムラーとはりあって鼻を明かしてやる」(13) という意気込みで、ビリーが救出作戦を決行したのは事実としても、なかば救出劇をハリウッド映画のように考え、功名心にかられた、きまぐれな行動であったとも非難される。

ビリーの派手な行動に対しては、語り手も冷やかな目を向ける。ビリーが所蔵の彫刻を寄贈し、さらにそれを収める庭園を造る目的でエルサレムを訪れた際、居合わせた語り手は、結局彼の目的は、「ショービジネスのはるかかなたのレベルに達し、ユダヤの歴史に名を残すこと」(60) と皮肉っているが、自分の立場を歴史から切り離されたと受けとめ、運命と甘受している語り手にとって、このビリーの行動は軽薄に映り、違和感はぬぐえない。

物語の中盤のクライマックスは、夫に代わり、妻のソレラが、単身ビリーに面会を求めて直談判に行くくだりである。素人らしい無謀さで、歴戦の悪党と対決しようと考えたソレラはビリーの元秘書から、彼の行状を暴露した日記を手に入れ、それを種に、ビリーと夫との面会を実現させようとする。しかしながら、もちろん、巨体と夫への愛情以外は全く無防備なソレラの思惑通りに行くはずもなく、計画は失敗に終わる。ソレラは、何故、それほどまでに熱心に夫とビリーとの邂逅を画策するのか、語り手に説明する。「ハリリーの人生のひとつの章に区切りをつけないといけないの。(中略)〔彼は〕ユダヤ人滅亡の一部だもの。危険にさらされなかった大西洋のこちら側で、私達は、それと対峙する特別の義務があるのよ」(60) 彼女は義務という言葉で、ビリーの、ひいてはアメリカ人の歴史への参入の必然性を説いている。それなのに、



実際は何もせずに手をこまねいているアメリカのユダヤ人全体への根深い不信感を、彼女はこのように表明する。——「ユダヤ人は、ヨーロッパが突きつけてきたことをすべて生き延びたわ。運よく残った人達のことだけど。でも次の試練が待ち受けていたのよ。アメリカのことよ。しっかりと流されずにいられるの。それとも、アメリカは彼らにはあまりにも荷が重すぎるかしら。」(65) 彼女が突き付ける問いかけは、アメリカという土壌で変節していくピリーらへの怒りがこめられているのだが、しかし語り手はこれに答える術を持たない。自分自身がまさに、アメリカ化するユダヤ人という現象の真っ只中において、その意味を十分に知っているから彼女の怒りを受け止めることができないのだ。

作品の後半は、ソレラの問いかけに対する語り手の心情の揺れを中心に描かれる。あるとき、エルサレムに住んでいるハリーの親戚が窮乏しているとの連絡を受けた語り手は、それをよい機会に30年ぶりに、ハリーたちを見つけたし、旧交を温めようとする。ハリーたちを探すために、彼は、片っ端から旧友たちに電話をかける。しかし、昔の知り合いはそれぞれみな、疎遠になり手掛かりはつかめない。ここからも、かつては結束を誇った民族の絆は消え果てていることが歴然とする。中でもウォール街で腕を磨き、高級住宅街に居を構える辣腕の投資コンサルタントのハイマン・スワードロウは慇懃な風を装いつつ、冷淡な反応を示す。彼は、ハリーの親戚なのに、交際は途絶えている。ユダヤ人同士の付き合いは、拒否しているのだ。語り手は、自分も同化の道を行ってきたのだが、「今時は、改宗しなくても、同化できる。エホバとイエスの選択をしなくてもすむ」(81)と批判の目を向けるようになる。ここから彼の気持ちの微妙な変化が見える。アメリカ流に生きることを実践してきたながら、やはりそれだけでは不十分なのだ。

自慢の記憶力にもかげりがさし、孤独の身の上の語り手はうちひしがれ、ひたすらフォンシュタイン夫妻との再会を願う。今や、豪勢な成功者としての生活よりも何よりも心を許せる、ユダヤ人の友人を求める。実は彼の気持ちの裏側には、深い悔恨の情が生まれているのだ。ある夜、思いがけず見た夢が彼に

一種の啓示を与えた。誰かが掘った穴に落ちこみ、はいだせずにいる。穴の縁に策謀者の足を見つけるが、今度は下に目を向けると同じように疲弊しきった者が倒れている。あり地獄のように、もがいても抜け出せない穴の中に運命を共有する誰かがいる。それは「はじめから築いてきたらゆる物を粉々に砕く」(87)ほどの衝撃を与える、彼にとっては初めて経験する感覚である。自分には「容赦ない残虐が分かっていなかった。」(88)と彼は気付く。それはとにかく、新世界にあって、「自由の中で育ち」あらかじめ「平等で、力もあり、かつてのユダヤ人たちのように、むりやり死に追いやられることもない」(88)という幸福の代償であることがひしひしと感じられる。そうなるとあのソレラの詰問は、ビリー・ローズに向けられたのではなく、「結局は私のことを言っていたのだ」(89)。けれどもこのことに気がつくとき、苦悶のうちに、目の前には「ユダヤの歴史の断片がきらきら光りながら、よみがえってきた」(89)。ここで、語り手は、歴史との和解を体験する。どうしても、ハリーたちと会いたい気持ちはますます高まる。しかし、物語は意外な結末を迎える。

実に示唆的な夢をみた後に、語り手はやっとハリーたちの住所をつきとめ、喜び勇んで電話をするが、聞かされたのは、訃報である。ユダヤの歴史を重んじ、アメリカでユダヤ人は生き残れるのかというソレラの不安は、実は息子によって現実化してしまっていた。ハリーにとっては、おそらく「不可解なアメリカ的理由」(101)によって、かつては天才とまで言われた自慢の息子は道はずれてしまう。得意の数学理論を応用して、いかさまブラックジャックを思いつき、面倒に巻き込まれてしまったのだ。一獲千金を夢見た息子は、堅実な父親ではなく、ビリー・ローズ的生き方を選んでしまう。あわれなことにこのような息子を思う一心で、彼の元に慌てて駆け付ける途中で、両親は交通事故を引き起こし、あっけなく死んでしまった。語り手は、期待していた再会がままならないばかりか、これがアメリカのユダヤ人が立ち向かわざるを得ない現実であることを再び思い知らされるのだ。

彼は、まさに老境にさしかかって、自分のアイデンティティが揺らぐ思いをし、その感情を共有しようとした夫妻はすでにいない。さらに電話の取り次ぎ

に出たようなアメリカの若者に、何を言っても始まらない。気を取り直した彼は、たったひとり、神に「死者を記憶するように」(102) 祈る。一方で「ペラロサコネクションについて覚えているあらゆることを記録に留めようと思う。そして、記憶術の成功とともに、全てを残そうと思う」(102)と彼は決心する。

語り手は、夢の中で、生まれて初めてユダヤの歴史の一部である自覚を得た。また最後に、神に祈ることで、ユダヤ的なるものへの回帰もうかがえる。しかしハリーの息子がはからずも暴露したアメリカの生活は、否定すべくもない彼の一部でもある。だから記憶術の成功という、アメリカ社会での彼の功績と、ハリーたちの人生全てを示す、ペラロサコネクションとを同時に覚えていこうとする彼の姿勢に、アメリカのユダヤ人としての生きるべき道が表されているのだ。

このような結末を見ると、なぜ作者は記憶術の大家であるユダヤ人という設定をしたのか理解できる。なにしろユダヤ人は「記憶の民」と呼ばれる。マルセル・デュボア (Marcel Dubois) はこう分析する。

記憶せよと呼びかける中で、ユダヤの意識は、存在の根底に訴えているのである。それは、民族の精神的態度を特徴付けているといえる。この民族は、正しくも時を刻む人とか時の建設者と呼ばれて来たが、記憶の民と呼びかえてもよからう。しかしながら、我々は、過去の出来事の保持と伝達とは全く違う何かがあるのに気付く。回想という心理的ないし歴史的機能よりずっと深いところに、存在論的記憶、聖アウグスチヌスというところの自己あるいは神に対する存在の行為がある。イスラエルの自己意識は、恒久の源泉たる民族のアイデンティティと歴史に発している。<sup>64</sup>

ユダヤ人にとって記憶するとは、単に民族の歴史を知り、心に留めることではない。ユダヤの歴史すべてを引き受けて、自分の存在意義をつねに歴史の中で問い直していくのが、彼らの生き方であるというのだ。ところが、この語り手は「記憶こそわが人生」(2) をモットーに生きて来たのだが、その記憶とはアメリカ社会の中で技術として切売され、経済的な成功をおさめるための方便となり果てて、本来的な歴史のなかの記憶の意味を失っている。しかし最後に彼は、厳しい現実とともに、歴史を記憶に留め、ほんとうに自分の「人生」

とすることの重要性を知る。そうすることで、アメリカの中のユダヤ人という自らの立場を明確にできると納得するのだ。この主人公とほぼ同年齢のペローは彼の心情の変化を追うことで、もう一度、彼の言うところの、自分自身の二つの「存在の源」の意味を問い直そうとしているのではないだろうか。最後まで、特定の名を与えられなかった語り手によって、作者はアメリカのユダヤ人一般を代表させているのだが、同時にまた語り手は作家自身の分身であるとも言える。*The Bellarosa Connection* では、アメリカの記憶、ユダヤの歴史の記憶、双方を背負って生きて行く語り手が、作家の根幹にかかわる問題を代弁しているのだ。

#### Notes

- (1) Yuzaburo Shibuya, *Bellow: Kaishin no Kiseki* (Tojusha, 1978), p.14. [渋谷雄三郎『ペロー回心の軌跡』冬樹社]
- (2) Louis Harap, *In the Mainstream: The Jewish Presence in Twentieth Century American Literature, 1950's-1980's* (Greenwood Press, 1987), p.99.
- (3) John J. Clayton, *Saul Bellow: In Defense of Man* (Indiana University Press, 1968), p.99.
- (4) Tajiro Iwayama, *Saul Bellow, Seminars on Modern English and American Literature 26* (Yamaguchi Shoten, 1982), p.26. [岩山太次郎『ソール・ペロー』山口書店]
- (5) Saul Bellow, "Starting Out in Chicago," *American Scholar* 44 Winter, 1974-75, p.73; hereafter cited in the text.
- (6) Sam B. Girgus, *The New Covenant: Jewish Writers and the American Idea* (University of North Carolina Press, 1984), Pp.21-22.
- (7) Saul Bellow, "I Took Myself as I Was," *ADL Bulletin* 33 December 1976, p.3. quoted in Stephen J. Whitfield, *American Space, Jewish Time* (Archon Books, 1988), p.64.
- (8) Saul Bellow, *Mr. Sammler's Planet* (Penguin, 1970), p.14.
- (9) "Bellow's Best," rev. of *The Bellarosa Connection*, by Jeffrey Hart, *National Review* March 5, 1990, p.52.
- (10) Rev. of *The Bellarosa Connection*, *The Nation* November 27, 1989, p.653.
- (11) Saul Bellow, *The Bellarosa Connection* (Penguin, 1989), p.2.; hereafter cited in the text.

- (12) Gerald Strober, *American Jews : Community in Crisis* (Doubleday & Company Lnc., 1974), p. 8.
- (13) Carol Rittner ed., *Elie Wiesel : Between Memory and Hope*, trans. Yoshito Takigawa (Simul International, 1990), p. 88. [キャロル・リトナー編 『ホロコーストの記憶』 サイマル出版会]

——大学院博士課程後期課程——